

【『琅』・あとがき】

☆これまで本誌発行に関する全ての業務を担っていた主宰者（宗内敦）から、その一部を引き継ぐことになった。すでに、割り付け等に関しては、何度か主宰者宅でコンピュータの前に座り、その手ほどきを受けてきた。今回から、業務をもう少し拡大すべしとのことから、あとがきも担当することになった。

☆そこで、改めて創刊号（一九九二年・平成四年、十月発行）の「あとがき」に目を通してみた。そこには、「金剛石たらずとも、どんな石くれもみな、清しい珠となり、麗しい玉となることができる」との思いから、「珠玉に向けて（中略）いつそうの錬成をはかるための場」として同人誌を企てたとある。お気づきの方もおいでになると思われるが、主宰者は、第二十八号の「あとがき」に、創刊号のあとがきの一節を引用した後、「美しい玉となるには麗しい文を書かねばならぬ。麗しい文を書くには清しい心を持たねばならぬ。その清しい心は、美しい心を持つ人々が集う世の中からもたらされる・・・」と続けている。

☆業務の引き継ぎは、当初、原稿収集・編集・割り付けという、どちらかという技術的な側面のことと受け止めていたが、こうして「あとがき」を読んでもみると、託されているのは、技術的と言うよりは精神的なことのように思えてくる。「麗しい文章」も「清しい心」も、まだまだ心許ない新編集者としては、「美しい心をもつ人々」すなわち、同人諸氏及び読者の皆様のご支援・ご鞭撻を仰がざるをえないところである。

☆本稿構想中に、米国大統領の選挙があった。一緒にテレビを見ていた孫（小学二年生！）が、トランプブリードの途中経過を聞いて、「これは大変だ。戦争になると、テレビで言っているとの返事であった。戦争云々はともかく、結果についてのおおよその受け止めは私も孫と同程度で、マスコミではこの結果を、「世紀の大逆転」「想定外のこと」と評していた。後になって、今回の選

挙結果を正しく予想していた人もいたことを知ったが、そうした人は例外的で、少なくとも、私や孫の知るところではなかった。☆しかしながら、「想定外」という表現は、五年半前に、為政者も自治体も企業も科学者も、封印したのではなかったか。それにも拘わらず、今回再び、大方のマスコミや評論家は、自分たちの取材力・想像力の貧困さを、「想定外」の一言で片付けて涼しい顔をしているように見える。結果論と言ってしまうとそれまでだが、今回の選挙前の報道は、ミスリードの誹りを免れないのではないか。

☆業務を引き継ぎ、丁寧な仕事と想っていた矢先、体調不良に陥り発行が一月以上も遅れてしまった。これを想定外のことだったなどと言いつつも思いはしない。生身の人間には思わぬことが起きる。そうしたことも想定し、新たな編集体制を考えて行きたいと思う。皆様の、ご理解ご協力を賜りたい。（松村茂治）

〈評壇・執筆者紹介〉

・牛村 圭（うしむら けい）国際日本文化研究センター教授。専攻は比較文学・比較文化。著書『「文明の裁き」をこえてー対日戦犯裁判読解の試み』（中央公論新社〔中公叢書〕、二〇〇一年 第十回山本七平賞を受賞）。『「戦争責任」論の真実』（PHP研究所）、『東京裁判を正しく読む』（共著 文春新書）

〈次号原稿締め切り日〉 二〇一七年三月末日

『琅』三十一号 二〇一六年十一月発行  
編集・松村茂治 発行・宗内敦  
発行所 193-0821 東京都八王子市市川町 一 二八二二〇二  
「琅の会」・丸（〇四二一六六一―一二二七）  
印刷所 株式会社ポプルス